

イギリスのナショナル・テイル ― マライア・エッジワースの『パトロネッジ』¹

高 桑 晴 子

1800-1817年の主たる作家活動期間において、マライア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1768-1849)の執筆活動は多岐にわたり、それらを整理するのは簡単なことではない。だが、「英文学」そして「小説」という枠組みで論じようとした場合、エッジワースを語る文脈は『ラックレント城』(Castle Rackrent, 1800)をはじめとするアイルランドを舞台とした小説と、『ベリンダ』(Belinda, 1801)、『レオノーラ』(Leonora, 1806)などイングランドを舞台とし、多くの場合女性を主人公とする家庭小説に大別できる。これまでの批評の多くもこの線に沿ってエッジワースの著作を分類し、論じてきたといってもよいだろう。それは、エッジワースの再評価が女性作家の再発掘、アイルランドにおけるキャンオン形成という20世紀末の批評動向と連動していたからでもある。実際にエッジワースのアイルランド小説、家庭小説は、それぞれポスト・コロニアリズム批評やジェンダー批評の枠組みで語られていく²。一方、2000年代に入り小説というジャンルが問い直される中で、18世紀の様々な文芸スタイルとエッジワース作品との影響関係が論じられるようになり、より柔軟にエッジワースの様々な著作がいわゆる「ジャンル」の枠を超えて読まれるようになってきてきている³。

とくに、18世紀後半から19世紀初頭における「ブリティッシュ・ネイション」という概念の形成を考えたとき、エッジワースのイングランドを舞台とする家庭小説とアイルランド小説の関係は興味深いものとなる。19世紀初頭には「ナショナル・テイル」と銘打つ小説が生まれ、イギリスという国のありようを問う小説がとりわけアイルランドから複数出版された。それには、1801年にアイルランドが連合王国に併合されたことや、フランス革命およびナポ

レオン戦争の影響という対外的な事情など、歴史的な背景が関係している。エッジワースの小説もこのような事情と無縁ではない。先に挙げたエッジワースの二つのタイプの小説を考えたときに、両者に通底するものとしてエッジワースの「ブリティッシュネス」への意識を挙げることができるのではないか。そこに見られるナショナル・アイデンティティへの問題意識は、1801年に連合王国に併合され、イギリスの一部／辺境となったアイルランドに住む者としてのエッジワースの関心を示しているのではないか。

そのような観点から、本稿では 1814 年に発表された『パトロネッジ』(Patronage)について考えてみる。『パトロネッジ』は、エッジワース作品の中でも最も長い小説で、彼女の最大の特長であり弱みでもある教訓主義も相俟って「最も読みにくい」とされ(Butler, *Maria Edgeworth* 337)、これまであまり論じられてこなかった。実際、登場人物も多く、エピソードも多岐にわたり、いささか散漫な印象を与えないわけではないが、パーシー家(the Percys)の 3 人の息子たちの職業訓練を通して積極的に公共の領域(public sphere)に言及する一方、二人の娘ロザモンド(Rosamond)とキャロライン(Caroline)の場面では、『ベリンダ』のような風俗小説の家庭的で私的な世界が展開する意欲作である。また、『パトロネッジ』はその物語の冒頭から意識的にヨーロッパ諸国に言及したり、イギリスの海外領土に言及したりと地理的に大きな枠組みの中でイギリスを捉えようとしている。このようなコンテクストの中で、『パトロネッジ』において、エッジワースはどのようにイギリスという「ネーション」を提示するのであろうか。イギリスという枠組みがエッジワースの著作活動を通じて重要な参照点・準拠点であったことを『パトロネッジ』の読解を通して明らかにしたい。

1

物語の中心は、パーシー家の人々であり、小説の構図は、この一家が見舞われる不運にもかかわらず、自らの力で人生を切り開いていくさまを、政界の重鎮オールドバラ卿(Lord Oldborough)の寵遇^{パトロネッジ}を当てにして自ら努力しようとしないうファルコナー家の人々(the Falconers)のあり方と対照させるといふ、典型的な教訓話の枠組みになっている。このように、主軸となるプロッ

トはかなり分かりやすいものなのだが、このパーシー家の人々を軸としつつも総勢 65 人もの人物が登場し(Ó Gallchoir 108)、ともすれば主筋を忘れそうになるほどありとあらゆる話題が展開されていく。その中でも、一つの眼目となっているのが、男子の職業訓練の問題だといえるだろう。

この小説の中には多種多様な職業の男性が描かれる——法曹界、軍、医学、聖職、政治、商人そして地主。女性であるエッジワースがこれほどまでに男性の「公」の世界に踏み込んで書いたことは、この小説に対する評価を低くする一因ではあったようだ。実際、医学および法律問題でエッジワースは誤謬を犯したようで、特に法律関係に関する誤りは後年改訂の際にその前後の筋を変える必要が生じるまでのものであった(Butler, “Introductory Note” xxii)。4 巻にわたって読者をつなぎとめるだけの作話術がないこと、そしてイングランドの上流階級という自分がよく知らない世界を描いているために、最大の強みである写実性が損なわれているというものが主だった評価とみていいだろう(Rev. of *Patronage*, *The Quarterly Review* 10.20: 308-9)。また、「公的」な世界を描いたことで彼女の父親の影響力がわけても取り沙汰され、父親への反感から酷評を受けた面もあった⁴。

実際、エッジワースの父リチャード・ラヴェル(Richard Lovell)は 1809 年に『職業教育論』(*Essays on Professional Education*)を発表しており、エッジワース自身もその執筆に関与していた。したがって、『パトロネッジ』はある意味で、父親の理念をフィクションにしたという側面もある⁵。実際、『職業教育論』の目次と『パトロネッジ』で扱われる登場人物たちの職業とを比べてみるとその連関性が際立って興味深い。

目次

- 第一章 職業選択について
- 第二章 聖職について
- 第三章 陸・海軍職について
- 第四章 医学的職業について
- 第五章 地方紳士の教育について
- 第六章 法律職について

第七章 政治家の教育について

第八章 君主の教育について

パーシー家の長男ゴッドフリー(Godfrey)は、陸軍に入ることになる——父親が「このような時代に、必要とあらば自国の防衛に進んで身をささげるべく、数年は軍役に従事することはすべての跡取り息子の義務である」と考えるからだ(NSW⁶ 6: 55)。二男アルフレッド(Alfred)は法廷弁護士として、そして三男エラスムス(Erasmus)は医者として成功する。これに対して、ファルコナー家は、コネを頼りに息子たちを職業に就かせ、失敗する——長男は聖職で、二男・三男はそれぞれ外交官として、軍人として。『職業教育論』で取り上げるには一風変わった「地方紳士」「君主」という項目についても、農村で静かで家庭的な生活を送るパーシー氏そして、アルテンベルク伯爵(Count Altenberg)が仕えるドイツのある大公の物語という形で『パトロネッジ』はそれぞれを取り上げている。

『職業教育論』は、以前にエッジワースが父親と共著で出版した『実用的教育論』(*Essays on Practical Education*, 1798)という児童教育の指南書同様、基本的に非常に実用的な内容となっている。それぞれの職業に要求される素質や素養を同定し、それらをいかに発育の諸段階において涵養すべきかを非常に合目的的に提案する。そこに見られる理念はプロフェッショナリズムといてもよいだろう。そのプロフェッショナリズムは、『パトロネッジ』においてパーシー家の「才能、不屈の精神そして清廉さが、早晚成功を約束する」べきだという信念に反映される(NSW 6: 144)。とくにその職業で生涯生計を立てなくてはならない二男と三男の物語は、この理念を地で行く立身出世の物語だ。『パトロネッジ』という表題が示す通り、若い男性登場人物たちの職業的成長の物語において示されるものは、旧来の人材登用制度への批判(ファルコナー家のパトロンとなる政界の重鎮の名が「旧い町」を意味するオウルドバラであるのは偶然ではないだろう)だ。

^{パトロネッジ}
「寵遇という制度は我が国にとって破滅をきたすことになると思うからです。役人にしろ、軍人にしろ、聖職者にしろ、職業という名誉が、

実力ではなく最良によって与えられるとしたら——国家の信用と威厳にかかわる職位が、策謀や賄賂によって得られるとしたら——分け隔てのない競争は終わりを告げ、結果、それぞれの努力も終わりを告げるのです。栄光という報酬を失うことで、才能も清廉さも士気を失い、存在しなくなることが多い。籠^{パトロネッジ}遇の産物である腐敗した愚鈍な輩によって、この国の政務が指導され、この国の戦いが指揮されるとしたら、どんなことになるだろう？どんな戦いになるだろう？——そのような指導者や防衛者を頼みとする国は呪われる！——イングランドがそのような運命に陥ることがないように！——そして、そうならないためにも、誠意ある独立したイングランド人一人ひとりが、この卑しい破滅的な制度に、顔を、手を、心を背けなければなりません——私もその一人としてそうします。」(NSW 6: 108-9、下線筆者)

この引用に見られる実力主義的な価値観は、この時代の気分を反映したものといえるかもしれない。『パトロネッジ』と同年に出版されたジェイン・オースティン(Jane Austen)の『マンスフィールド・パーク』(Mansfield Park)においては財産を持たないプライス家(the Prices)の子供たちが、海軍や官庁、東インド会社において、それぞれに頭角を現し出世していくさまが予見されており、その3年後に出版された『説得』(Persuasion)においては、準男爵のエリオット家(the Elliots)が没落し、資産と家柄のために歯牙にもかけられていなかった海軍士官たちが軍での功労をもとに旧来の地主階級であるエリオット家^{メリトクラシー}に取って代わる存在となっている。実力主義に基づく登用と、エスタブリッシュメントへの揺さぶり——上記のパーシー家の父親の発言が興味深いのは、それが「国家」の存亡というものと密接に結びついて論じられている点であろう。もちろん、有用な人物の能力と努力を評価することこそが国の繁栄につながるというその理屈自体は珍しいものでも、目新しいものでもない。しかし、アルフレッド・パーシーやその弟エラスムスの職業人としての個人の立身出世の物語が、その父親の言葉を通して、「誠意ある独立したイングランド人」というナショナル・アイデンティティと結びつく。つまり『パトロネッジ』における男性登場人物たちの公的な世界はイギリスという国の

在り方を模索するものとして呈示されているのだ。

エッジワースが呈示するプロフェッショナルリズムという理念とイギリスという社会秩序の相関関係を考えた場合、『職業教育論』における特異な項目、「地方紳士の教育」と「君主の教育」は注目に値する。君主論そのものはマキアヴェリを引くまでもなくつとに論じられてきた。しかし、君主を聖職者や法廷弁護士、医師や軍人などと同列に扱うことは、君主を特権的地位ではなく、養成を必要とする「職業」の一つと定義していることを意味する。為政者は「教育」によって「為政」という職責を理解し、履行しなくてはならない——ここにエッジワースが描くイギリスの社会秩序の構図が見えてくる。それはミドル・クラスの実力主義的エトスに基づくヴィジョンである。

しかし、エッジワースのイギリスという国の在り方、国家観を見るうえでさらに重要なのは、「地方紳士の教育」だろう。「紳士(gentleman)」もまた「職業(profession)」という言葉で記述するのは意外な感じがする項目だ。というのも、本来、“profession”とは「特定の学問分野についての知識を有することを公言する職業」で、とくに「神学、法学、医学の三分野、そして軍事」に適用される表現であるのに対し(“profession,” def. III.6.a)、“gentleman”には、「商売をしなくても安寧に生活する財力を持っている人。金と暇のある人」という意味合いが含まれるからだ(“gentleman,” def. 4.a)。もちろん、“gentleman”や“profession”の指し示すものは流動的であると同時に重なり合っていることは周知の事実であり、その限りにおいては“profession”と“gentleman”が並列されることは不思議ではないのかもしれない。しかし、エッジワース父娘のこの記述が興味深いのは、“profession”と呼ばれる専門職を、“gentleman”がその社会的地位を落とさずに、生計を立てることができる職業として、“gentleman”という有産／有閑階級に含めようとするのではなく、有閑階級と見える“gentleman”もまた「専門職」なのである、と職業の側に含めようとしているように見える点だ。実際、『職業教育論』は“country gentleman”と呼ばれる地方地主が身につけておくべき専門知識を縷々説明していき、その範囲は経済学から、イギリス法の原理、政治学、農学、工学、建築学、化学などにまで及ぶ。そして、『パトロネッジ』においては、パーシー氏が従弟の陰謀から主要な地所を失い、経済規模を大幅に縮小しなくてはな

らなかったときに、これらの広範な科学的素養を身に付けていたことが、小規模な地所の経営者としてどれほど役に立ったかを説明する。

使用人たちの手助けで一家はこの新しい狭苦しい住居に気持ち良く落ち着くことができたが、パーシー氏自身の職人としての技能も素晴らしく役立った。地方地主は工学と農学の原理を知っているべきだ、というのが彼の常日頃からの考えであった。それでこそ、少なくとも雇った職人たちに指示が出せるというものだからだ。[...]

新しい家に落ち着くと、パーシー氏は自分の農学の技能を生かせる、改良可能な土地を見て回った。[...] 彼は、本当に地方地主の暮らしをしてきたことを喜んだ。彼は農家の仕事を理解していたし、農業経営の詳細については有能な使用人たちの助力を得ることもできた。その使用人たちはパーシー氏が豊かであった時代に彼を慕っていた者たちである。
(NSW 6: 105-6)

専門的知識を身に付けた土地経営者という地方地主像には、実際にアイルランドのロングフォード州エッジワースタウン(Edgeworthstown, Co. Longford)でリチャード・ラヴェル・エッジワースが実践していた地主としての生き方が反映されている。エラスムス・ダーウィン(Erasmus Darwin)をはじめとするイングランド中部の科学者や産業資本家の集まりであるルナー協会(Lunar Society)のメンバーでもあったエッジワースの父親は、積極的に土地改革を行い、農耕機械を作成したし、地方判事またアイルランド議会の議員を務めもした。父親の死後、エッジワースが完成させた父親の回想録が示すように、エッジワースは父親の啓蒙思想に基づく土地経営を理想とし、その理念を職業人としての地方地主という形で提示していったのだ。

このような観点からすれば、パーシー家の男性たちを通して職業人としての成長物語を描く『パトロネッジ』には、エッジワースが1800年代、10年代に発表したアイルランド小説と通底するものがあるのも不思議ではない。

『倦怠』(Ennui, 1809)、『不在地主』(The Absentee, 1812)、『オーモンド』(Ormond, 1817)は、大筋で、アイルランドに地所を持つ若い男性主人公の成長物語と

ビルドゥングス・ロマン

いう枠組みをもっている。たとえば『倦怠』において、主人公グレンソーン卿(Lord Glenthorn)はアイルランドの領地に赴き、差配人マクロード(McLeod)に適切な土地経営の手ほどきを受けることで、イングランド時代の倦怠病から抜け出す。そればかりでなく、自分が本当は乳母の息子であり、正当な領主ではないことを知った主人公は、領主を辞すると法律家として身を立て、結婚を通してグレンソーン領の当主として返り咲くのだ。このように、エッジワースのアイルランド小説において、主人公の地主としてのプロフェッショナルリズムの覚醒とアイルランドの福利は不可分に結びついており、それは、『パトロネッジ』がイングランドを舞台にパーシー一家を通してイギリスという国の在り方を提示することとパラレルをなしている。こうしてみると、主人公コランブル卿(Lord Colambre)が不在地主制度がアイルランドにもたらした惨状を学ぶ『不在地主』が当初『パトロネッジ』の一部として構想されていたこともあながち不思議ではない。つまり、地方地主はエッジワース父娘にとって、イギリスという国の在り方を象徴する存在なのだ。

広い心を持つ人なら誰でも、イギリス帝国のジェントリーがその独立心を保っていくことを望むだろう。その独立心こそがジェントリー階級を諸外国の人々の羨望的とし、より重要なことに、ジェントリー階級自身を誇り高く、真に幸福にしてきたのだ。真のイングランドの地方地主ほど望ましい存在があるだろうか？地主は個人としての、市民としての、そして知識人としての自由を享受できるのだ——真に生活を利し、楽にしてくれるものを手に入れるだけの資産を持ちながら、空疎な贅沢を忌避する知性を持っているのだから。強欲、野望といった悪しき情念すべてから——少なくとも人間の本性が許してくれる程度には——逃れられ、家族、友情、愛情そして心の平穏を楽しむことが出来る。その一方で、継続的で、多彩な好ましい仕事に尽力するだけの十分な原動力もある。子供たちを教育し、小作人たちの向上に努め、法を施行し、科学や人文学の知識を培い、知識人たちとの交流を育むことに携われるのだ。地主は公のそして私的な義務すべてを、熱意とともに知識を持って遂行する。そして彼の影響下にある人々すべてに幾許かの安寧をもたらす。地主は、

その敬愛を勝ち得たいと望む人々すべてから、愛し、尊ばれ、敬われることが出来る。そして日々を無為に過ごしていないことを自覚し、神に自らが享受している幸福を感謝するのだ。(Professional Education 279、下線筆者)

『パトロネッジ』において、イギリス政府の重鎮であるオールドバラ卿はドイツ人アルテンベルク伯爵に、「教養ある、独り立ちした地方紳士とその家族(a cultivated independent country gentleman and his family)」とパーシー一家を誇らしげに紹介する(NSW7: 14)。エッジワースが描く地方地主像においては、「独り立ちした(independent)」、「自由な(free)」、「満ち足りた(sufficient)」といった属性が重んじられ、それこそがイギリスという国の根幹を支える価値基準となっている。実際、“independent”という形容詞はパーシー氏にしばしば付与される。そこには、独立した個人がその能力を発揮し、職責を全うすることがイギリスという国を形成するという、いわば「自由主義」「個人主義」的なナショナル・アイデンティティを見ることが出来る。『パトロネッジ』の職業観は独立した個人の力が正当に評価されそれが活力となっているイギリスという国家観を支持し、その「独立心(independence)」の象徴として地方地主をその中心に据えるのだ。

2

『パトロネッジ』の男性登場人物たちによって呈示されるエッジワースのプロフェッショナルリズム、そしてその中心に据えられる地方地主という存在に、エッジワースのアイランド小説と相通じるものがみられるとするならば、『パトロネッジ』の女性たちが織りなす世界は、エッジワースの家庭小説に見られる風習喜劇の延長で了解することができる。ファルコナー夫人の結婚市場での算段ぶりは『策略』(Manoeuvring, 1809)に通じるものがあるなどエッジワースが描く女性たちの世界は風俗小説の世界ではなじみ深いものだ。ここでもエッジワースの得意とする教訓話の枠組みは守られており、安っぽい才芸と流行を頼りに成り上がり、夫探しをするファルコナー家の娘たちや、才媛を演じ空疎な恋の駆け引きに明け暮れる社交界の花形レイディ・アン

ジェリカ・ヘディングム(Lady Angelica Headingham)、適切な家庭教育を受けることがなかったため道を踏み外すオールドバラ卿の姪ミス・ホートン(Miss Haughton)らがアンチ・ヒロインとなり、模範的なパーシー家の娘たちと対比される。さらに、パーシー家の二人の娘たちも、この時代の伝統的手法に則って、感情豊かな反面いささか思慮に欠ける姉嬢ロザモンドと冷静沈着で控えめな妹のキャロラインという対比が使われ⁸、キャロラインこそが理想のヒロインとして呈示される。

このことは、『パトロネッジ』の女性主人公の物語もまたエッジワースの家庭小説に共通する、否、風俗小説と呼ばれるジャンル全般に見られるパラドックスを抱えていることを意味する。つまり、分別のある控え目な娘というヒロインは、Claudia Johnson をはじめ多くの批評家が指摘するように、物語の牽引者という意味ではヒロインとなりづらいということだ⁹。エッジワースの教訓話においても、(小説のロジックにおいては) 非難されるべきアンチ・ヒロインの方が魅力を持ち、プロットの中心となるということはしばしば起きる¹⁰。例えば、『ベリンダ』において、「愛すること(loveing)」と「恋すること(being in love)」をはっきりと区別して理性的に行動するヒロインよりは(NSW 2: 263)、女だてらに決闘を行い、病におびえ、放蕩の限りを尽くすレイディ・ドラクール(Lady Delacour)のほうが興味深いナラティブの中心になるというのはもっともなことだろう。実際、エッジワースもこのジレンマには気づいており、ロザモンドを通してキャロラインは「ヒロインたるには均整が取れすぎている」と認めるのだ。

「本当に、キャロラインったら、十八でそんなに分別があったら、三十になったらどうする気なの？—気をつけたほうがいいわ！—それに、あなたは絶対にヒロインにはなれないわ—どんなに面白味のないヒロインになることかしら！—面倒にも巻き込まれないだろうし、冒険もしないだろうし [...]」(NSW 6: 71)

しかし、このような「絶対にヒロインにはなれない」ヒロイン像は、作家自らが意図したものであり、また時代が作家（ことに女性作家）にそれを要請し

たことも押さえておかなくてはならない。女性作家がフィクションを書く上で、規範からの逸脱と取られがちな「ロマンス(romance)」や「感傷小説(sentimental novels)」から距離を取っておくことは、その^{リスベクタビリティ}「体面」を保つ上で必要なことでもあったからだ(Spencer 142)。エッジワースもそのヒロインたちを「プリンセスでもなければヒロインでもない」と形容するとき(NSW 3: 83)、意識的に「ロマンス」や「ノヴェル」から距離を置こうとする。と同時に、その行為はある種ナショリスティックな意味合いを帯びて来る。というのも、それらの「ヒロインらしからぬ」ヒロインたちの家庭性、控えめさ、まじめさは、イングランドあるいはイギリス的な美德として表象され(何しろ申し分のない娘キャロラインを育んだのは、「教養ある、独り立ちした地方紳士とその家族」なのだ)、それは大陸風の、「フランス化」した女性としての社交に現を抜かずセンチメンタルでロマンティックなアンチ・ヒロインと対照されるのだ。

実際、アルテンベルク伯爵がキャロライン・パーシーとの結婚を決意するとき、彼は彼女の資質を、ヨーロッパ大陸諸国とイングランドを比較する言語で評価する。

アルテンベルク伯爵はイングランドで出会う定めだったのだ。教育、制度、世論、風俗そして社会及び家庭での習慣が絶妙に組み合わせり、女性に魅力、有用性、装飾性、気立てのよさをバランスよく与えているこのイングランドで出会う定めだったのだ。[...] かつてスイスの魅力であつた高貴な素朴さと、フランスの誇った洗練された洒脱さを兼ね備えた女性に、アルテンベルク伯爵はイングランドで出会う定めだったのだ。すなわち、広範で、洗練された豊かな理解力を持ち、彼の政治的指導者としての見解をすべて理解できる女性——しかしながら、権力を欲したり、公の世界に介入することを望んだりすることは微塵もない女性。文学そして科学の知識と趣味に恵まれながら、それをひけらかしたり気取ったりすることのない女性。機知に富み、会話に優れ、上質な交友関係を好みながら、その心を絶え間なく苛み、壊してしまうあの自己披瀝の欲求、貪欲で病的なまでの賞賛へ渴望を持つことのない女性。彼女は、フラン

ス人が好むいわく言い難い「^{スュクセ・ド・ソシエテ}社会的成功」というもの、安全な自己肯定、そして落ち着いた長続きする家庭生活の幸福を、公の世界でのあてにならない、人工的な、幻惑された生き方と取り違えてしまうそれとは無縁であった。ドイツのロマンスが思いつく限りの繊細さと豊かさを備えた感受性を持ちながら、大げさな表現や途方もない振る舞いに陥ることなく、そのような心をよしとする男の幸せのために、抑制され、心に秘められている——そのような女性にアルテンベルク伯爵はイングランドで会う定めだったのだ。あらゆる狭量な偏見とは無縁の「高邁な哲学精神」によって育てられながらも正当で適切な宗教観を持った、慎み深く、穏やかでありながら、しっかりした女性にアルテンベルク伯爵はイングランドで会う定めだったのだ。アルテンベルク伯爵の豊かな想像力が思い描き、その冷静な判断力が認め、その見果てぬ夢として望んでいた妻そのもののような女性に彼はイングランドで巡り会う定めだったのだ。(NSW 7: 52、下線筆者)

わざわざ指摘するまでもないだろうが、この長い引用の中で「アルテンベルク伯爵はイングランドで会う定めだったのだ(It was reserved for Count Altenberg, to meet/find in England)」という言い回しがしつこいほどに使われ、エッジワースが提示する分別のある家庭的な女性という理想像がいか「イングランド」そしてその延長としての「イギリス」というものと分かちがたく結びついているかを再認識させる。そして、注目に値するのが、このイギリス女性賛美が、他のヨーロッパ諸国との対比において描かれていることだ。洗練されているが自己顕示欲の強いフランス女性、感受性豊かだが情緒過多なドイツ女性に対する、知的で感性豊かでありながら抑制が効き家庭的なイギリス女性。この手の比較のご多分に漏れずステレオタイプのであり手前味噌ではあるが、こうして、イギリスはアルテンベルク伯爵によって「文明化した世界すべてのどこよりも、真の自由、平穏で幸福な家庭生活の恩恵を楽しむことができる」として永住の地に選ばれる(NSW 7: 230)。その意味で、広くヨーロッパを旅し、ドイツの一公国の国政にもかかわるアルテンベルクにキャロラインを通してイギリスを選ばせている意味は大きい。

アルテンベルクは、最終的には政治家を辞しドイツを出て、キャロラインとともにイングランドはヨークシャーに居を構えることになる。エッジワースの小説における家庭生活(domesticity)へのこだわりは、イギリスというネイションの問題として浮かび上がってくる。

3

女性たちの家庭空間だけでなく、男性の職業世界にも積極的に言及する『パトロネッジ』はとりわけイギリスの外の「世界」を意識した作りとなっている。そもそも、物語は、ハンブシャーのパーシー家の地所の沖合で、オランダ船が難破するところから始まる。そのオランダ船にはフランス人外交官でスパイでもあるトゥルヴィル氏(M. de Tourville)が乗っている。このフランス人外交官は、プロット上重要な役割を担い、彼が落としてしまう機密の暗号文書をきっかけに、ファルコナー氏はオールドバラ卿に近づき、^{パトロネッジ}「寵遇」をめぐるパーシー家との対照的な物語が展開するのだ。また、『パトロネッジ』の登場人物たちは何らかの形でイギリス国外とかかわることになる。陸軍に志願するゴッドフリー・パーシーはもちろんだが、エラスムスは彼の患者となる貿易商グresham氏を通じてオランダの商会とのつながりができるし（それが物語の終盤ゴッドフリーがオランダで拿捕されたときに彼の帰国を早めることにつながる）、アルフレッドは知り合いのアイランド人労働者の強制徴募を阻止しに行ったことから妹の未来の夫となるアルテンベルク伯爵と遭遇することになる。『パトロネッジ』は大陸への従軍や対仏海上戦への言及を通して対ナポレオン戦争下のヨーロッパを強く意識させる。アルテンベルク伯爵の故国は、内乱の勃発とフランスの侵攻に見舞われる¹¹。その間、イギリスでは内閣が割れ、オールドバラ卿に対する陰謀がひそかにフランス（そしてデンマーク）とともに反対派によって企てられている。『パトロネッジ』はイギリスをヨーロッパというより大きな文脈の中に位置づける。

ヨーロッパ情勢の中でイギリスを捉える『パトロネッジ』は、海外植民地を含んだ「大英帝国」という枠組みを強く意識してもいる。ゴッドフリーの部隊は西インド諸島に送られ、熱帯特有の気候と飲酒のために士官たちの多くが熱病に倒れる。西インド諸島以上にしばしば言及されるのがインドだ。ア

ルフレッドは東インド会社にかかわる訴訟を引き受ける。パーシー家の友人ハンガーフォード大佐(Colonel Hungerford)はヨーロッパ大陸の軍事作戦に参加したのち、インドに派遣される。また、ファルコナー家の三男はインドで財をなした提督の娘と結婚し、イングランドの結婚市場で失敗した妹はインドに行って結婚相手を探すことになる。かつて Franco Moretti が警告したように、ポスト・コロニアリズムの視点から西インド諸島やインドに過度の歴史的意味合いを読み込むことは危険であろう¹²。Moretti が指摘するように、この時代の小説において海外植民地は「神出鬼没(ubiquitous)な存在」で「リアル」な場所ではない。『パトロネッジ』においてもこれらの海外植民地は、言及はされても描写はされない、小説作法上「都合のいい場所」になっていると言える。しかし、ヨーロッパ情勢と対になることで、『パトロネッジ』のインドや西インド諸島は対ヨーロッパ諸国軍事作戦の一環としての側面を帯び、ここにイギリスという国家の地勢図があらわれてくる。あくまでもイングランドで展開する「教養ある、独り立ちした地方紳士とその家族」の物語は、それを取り巻くヨーロッパ、そして海外植民地という小説地図の広がり意識して初めて成立するものなのだ。

ここで、18世紀から19世紀への転換期、ロマン主義の台頭に伴って、ナショナル・キャラクターという概念への関心が増していたことを想起するべきであろう。1807年、スタール夫人(Mme de Staël)は『コリンナ—美しきイタリアの物語』(*Corrine ou l'Italie*)を上梓している。この中で、スタール夫人は女主人公をスコットランド人男性(そして、ある程度は彼の友人であるフランス人男性)と対比させることで、イタリアのナショナル・キャラクターを論じようとする。その3年後、彼女はドイツの様々な側面を論じた大部『ドイツ論』(*De l'Allemagne*, 1810)を発表している。ブリテン諸島に目を向ければ、「ナショナル・テイル」と銘打った最初の小説、シドニー・オウエンソン(Sydney Owenson)の『奔放なアイルランド娘』(*The Wild Irish Girl*)が出版されたのは1806年であった。以来、1810年代のアイルランド小説は、多かれ少なかれ、1801年の英愛合同後アイルランドの在り方をナショナル・キャラクター論に仮託して提示してきた。また、1814年のウォルター・スコット(Walter Scott)の『ウェイヴァリー』(*Waverley*)が、さらに歴史という時間軸を

導入して連合王国内のネイションの問題を扱ったのはよく知られている。

このような文脈の下で考えれば、先のアルテンベルク伯爵によるキャロライン評は、まさにエッジワースによるナショナル・キャラクター論だ。登場人物にナショナル리티を仮託する「ナショナル・テイル」得意の形式を利用している。キャロライン・パーシーを通して描かれるイギリスの優位性——洗練は重んじつつもフランスのように華美な虚飾に溺れず私的な領域を重んじるイギリス、堅実で現実的ではあるがドイツ・ロマン主義に通じる感性も豊かなイギリス——は、Cliona Ó Gallchoir が指摘するように、イギリスが他に類を見ない独自の美德を持っているからというよりも「他の国々の国民性の様々な特性を併せ持つからである」という点は注目しなくてはいけないであろう(116)。エッジワースが主張するイギリスの美点は各国の国民性のよさを受け入れ、程よく取り入れるその柔軟性にある¹³。この点について、吉野由利は、『パトロネッジ』の中で使用される「愛国心(patriotism)」の概念は啓蒙主義的コスモポリタニズムの系譜を引くものであり、いわゆる19世紀の民族主義的なナショナリズムとは一線を画すものであると分析し、それを端的に表しているのがこの小説が持つ多言語主義であると主張する(170)。理想のイングランドの「教養ある、独り立ちした地方紳士」であるパーシー氏が誰よりも諸言語に秀で、「普遍言語(Universal Language)」や暗号解読法に関心を持つことは、エッジワースのブリテン像の真髓が多言語主義、多文化主義にあることを示唆する。実際、パーシー氏は「大英帝国の幸福と繁栄」を目指す同志としてオールドバラ卿より機密暗号文書の解読を託され、それに成功する。『パトロネッジ』は、パーシー家が体現する家庭性^{ドメスティシティ}と多文化主義の共存をイギリスのナショナル・キャラクターとして、地理的な広がりの中で提示する。

このように『パトロネッジ』は、ヨーロッパ諸国との比較によって多元的で中庸を得た国イギリスというナショナル・キャラクターを描き出すが、そのときに、エッジワースはイギリス内のネイションの問題をどう扱っているのだろうか。アイルランド小説を書いていたエッジワースはこの問題に決して無関心ではなかった。実際、彼女のアイルランド小説は「ナショナル・テイル」が生み出した「国同士の結婚の物語(national marriage plot)」をいう定

式を利用してアイルランドの物語を描く。「^{ナショナル・マリッジ・プロット}国同士の結婚物語」ではイングランドからの来訪者と現地のアイルランド人の結婚が「ブリテンの『ナショナル・キャラクター』同士の融合の寓意」となるのだが(Trumpener 141)、エッジワースはアングロ・アイリッシュ地主階級出身者と旧来のアイルランド社会に根差す人間との結婚を通して、両者の融和とそれに基づくアイルランドの近代化という未来図を提示する。合同法によりイギリスと連合したばかりのアイルランドに住むエッジワースにとって複合国家イギリス内のネイションの問題は重要な問題だったはずだ。

だが、『パトロネッジ』においてイギリス内のネイションの問題は、ヨーロッパ諸国との対比によって浮かび上がるイギリス像の前に、ある意味で捨象されてしまう。ひとつには、先に述べたように物語の一部として構想されていた『不在地主』が独立した物語となったことが大きく影響しているだろう。

『パトロネッジ』で、アイルランド問題に直接触れる必然性がなくなったのだ。しかし、『パトロネッジ』から『不在地主』を独立させたことは逆に、イギリスを一つの統一体として押し出そうとした場合、その中の複合性を個別に扱うことが難しいことを示唆している¹⁴。『パトロネッジ』におけるイギリス内のネイションへの言及は、パーシー氏の新しい住居の環境がウェールズを思わせること、オールドバラ卿の姉がスコットランド人貴族に嫁いだこと、情に厚い、気のいいアイルランド人労働者オブライエン(O'Brien)との交流といったさりげないものとなり、それらの間の差異には触れられることはなく、あくまでもイギリスの景色の一部と化す。こうして、ハンプシャー州に居を構えるパーシー一家が前面に押し出され、イギリスのメトニミーとなれるのだ。

しかし、興味深いことに、『パトロネッジ』はパーシー家の人々の話では終わらない。パーシー氏が土地裁判に勝訴し先祖伝来の所領に戻った後、そして二人の娘が結婚した後で、この小説を締めくくるのは、脇役のチャールズ・ヘンリー(Charles Henry)なのだ。ヘンリーは、1798年の蜂起に加わり処刑されたユナイティッド・アイリッシュメンの一員と思われる男性と女中との間に生まれた子供として、ダブリンの商人に育てられ、コークで入隊し、ゴッドフリー・パーシーと知り合う。『パトロネッジ』においては、このチャール

ズ・ヘンリーの扱いが実に奇妙なのだ。除隊したヘンリーはゴッドフリーらの紹介でグレシャム氏の商社に入るといった経過を簡単に素描されるのみの存在だ。ところが、この小説は、そのチャールズ・ヘンリーが実はオールドバラ卿とあるイタリア人女性の間にできた子供であり、ハンブルクの銀行家の紹介でアイルランド人カトリック僧がダブリンの商人に預けたものであることが分かり、この生き別れになっていた父と子が再会して終わる。

実質的に終わっているはずの物語についているこのコードは、『不在地主』を別建ての物語とすることで捨象したはずのアイルランド問題の残滓ともいえる。実際、チャールズ・ヘンリーの境遇は『不在地主』のグレイス・ヌージェント(Grace Nugent)との類似性が高い。グレイス・ヌージェントは、私生児ではないかと疑われ、それがコランブル卿との結婚の障壁となっていたのだが、最終的にオーストリア軍に従軍していたイギリス人レイノルズ(Mr Reynolds)の正統な子供であることが分かる。ヘンリーにもグレイスにも出生の秘密が付きまとう。また、ヘンリーがユナイティッド・アイリッシュメンの反乱者との関係がほのめかされているように¹⁵、グレイスの父がオーストリア軍に従軍していたことは「ワイルド・ギース(the Wild Geese)」と呼ばれるアイルランド人傭兵との関係が示唆される。Ó Gallchoir はこの『パトロネッジ』におけるアイルランド問題の表出を積極的に捉え、ナポレオン戦争下のヨーロッパの再編によって、かつて反逆者とされた国外追放者の「復員」が可能になり、「ブリティッシュ・ネイション」の再想像(reimaginings)が起きているのだと結論付ける(131)。『パトロネッジ』は、アイルランド育ちの青年とイギリスのエスタブリッシュメントを代表する政治家との再会という物語を、パーシー一家を中心とする「ブリティッシュネス」の物語の中に組み込む。

『パトロネッジ』は、ナポレオン戦争下のヨーロッパを背景にイギリスのナショナル・アイデンティティを問う。エッジワースは「独り立ちした」、「自由な」、「満ち足りた」といった属性をイギリスの価値基準として設定し、その実力主義的な風土の上に男性主人公の職業的成長を描く。そして、『パトロネッジ』のナショナル・アイデンティティへの関心の中心、そして職業観の

中心に地方地主を置くことで、主人公の地主としての意識の覚醒と、アイルランドという土地への愛着と責任感の喚起という、アイルランド小説のビルドゥングス・ロマンス成長物語のテーマを重ね合わせるのだ。

一方で、『パトロネッジ』はその小説世界に、女性たちの風習喜劇を取り込むことで、『ベリンダ』に始まる家庭的な女性というテーマを、より顕著な形でイギリスの「ネイションの物語」の中に取り込む。キャロライン・パーシーに代表される、分別のある、家庭的な慎み深い女性、そしてその女性がつかさざる家庭生活こそが、イギリスの根幹である「教養ある、独り立ちした地方紳士」を存在せしめるものだとするのだ。『パトロネッジ』はナポレオン戦争下のヨーロッパにおける「大英帝国」という枠組みのもと、エッジワースがアイルランド小説、風俗小説という二つのタイプの小説を通して描いてきた「ブリティッシュネス」への意識を問う作品となっているといえる。そして、その膨大なエピソードを通して、その地理的に大きな枠組みの中でのイギリスの中心に、「教養ある、独り立ちした地方紳士とその家族」置く「イギリス」のナショナル・テイルとなるのだ。

註

1 本稿は、18世紀イギリス文学・文化研究会第14回例会(2009年10月31日於専修大学)における研究発表「マライア・エッジワースのプリテン像: *Patronage* 読解」および International Conference: Digital Romanticism(2010年5月22-3日於東京大学)における発表原稿 “Representing British National Order: Maria Edgeworth's *Patronage*” をもとに、加筆訂正したものである。また、この研究は専修大学人文科学研究所の共同研究『長い18世紀』のイギリスにおける帝国・身体・女性」の研究成果の一部でもある。共同研究員である末廣幹、石塚久郎両氏にお礼を申し上げる。

2 ジェンダー批評においては、Elizabeth Kowaleski-Wallace、Caroline Gonda らにより実際のエッジワース父娘の関係と関連付けられながら、『ベリンダ』などの作品にみられる家父長的価値観への同調と反発という緊張関係の問題が論じられてきた。一方、W. J. McCormack をはじめ Julian Moynahan、Vera Kreilkamp らはイングランド系植民者の不安を表象するアングロ・アイリッシュ文学の系譜にエッジワースのアイルランド小説を位置付ける。

3 例えば、Michael Gamer や Sharon Murphy はエッジワース作品における「ロマンス」の要素を重視し、それを広く児童向け作品から風俗小説、アイルランド小説にまで適用している。

4 『エディンバラ・レビュー』(*The Edinburgh Review*)は『パトロネッジ』について、「この箇所やこれから指摘する箇所が紛れもなく彼女の筆によるものか、と我々は時々疑

いたくなるのである。私どもは彼女の文体をよく知っているつもりである」と述べ、「とある重苦しい人物が彼女の筆致を支配し」「エッジワース嬢本来の品の良さ」が出ていないと指摘している(22.44: 433)。この書評を書いたシドニー・スミス(Sydney Smith)はエッジワースの父親を嫌っていたため、個人攻撃にも近い批評を書いたとされる(Butler, “Introductory Note” xxv)。

5 『パトロネッジ』の前身は1787年ころからリチャード・ラヴェル・エッジワースが就寝前の物語として家族に語って聞かせた「フリーマン一家」(“The Freeman Family”)であるといわれている。エッジワースはそれを記録にとり、1799年に一度劇作品として出版しようと考えていたといわれている(Butler, “Introductory Note” viii; Newcomer, 73)。その意味では、父親自身が寓意的物語として語っていたものを長編化したと言ったほうが正しいのかもしれない。

6 エッジワースの主要作品からの引用は Marilyn Butler & Mitzi Myers (eds), *The Novels and Selected Works of Maria Edgeworth in 12 vols.* (London: Pickering & Chatto, 1999-2003)による。以下この著作集からの引用は NSW として示す。

7 土地所有階級と職業との関係は、Lawrence Stone & Jeane C. Fawtier Stone, *An Open Elite? England 1540-1880*, abridged ed. (Oxford: Oxford UP, 1986), 145-154 ページに詳しい。

8 Elizabeth Kowaleski-Wallace をはじめとして多くの批評家がキャロラインを姉娘としているが、姉妹がいる場面ではロザモンドが「ミス・パーシー」と呼ばれ、キャロラインは「ミス・キャロライン」と呼びかけられていること、また、キャロラインがデビューするはずだった舞踏会を欠席したときに、ロザモンドはその会に出席していることから、ロザモンドのほうが姉と見るのが妥当と思われる。

9 Johnson はハンナ・モア(Hannah More)の小説が抱える矛盾として、「完璧に立派な女性レイディというものとは全く表象することができない。というのも、それほどまでにつつましく控えめな女性は、目にとめられることも、耳にされることも、そのほかの方法で非存在でなくなることもよしとするはずはないからだ」と述べている(18)。

10 拙論、“Maria Edgeworth’s Domestic Novels and National Heroines,” 17-22 ページ参照。

11 『パトロネッジ』において、アルテンベルク伯爵の故国は、意図的にドイツのどこに該当するのかは特定不能にしてある。Cliona Ó Gallchoir は、『パトロネッジ』をスタール夫人の『ドイツ論』との関連で論じ、ナポレオン統治下のフランスに対抗する形でドイツそしてイギリスが描かれていると見る(113)。Marilyn Butler は、さらに、アルテンベルクとキャロラインの結びつきに北部ヨーロッパのプロテスタント・アイデンティティを見る(“Introductory Note” xx)。

12 Moretti は『マンスフィールド・パーク』のサー・トマス・バートラム (Sir Thomas Bertram) のアンティグア行きについて、それは、プロット上サー・トマスにマンスフィールド・パークに居続けられては都合が悪く、アンティグアが彼の行き先として一番都合がよかったからであるという、もったもであると同時にいささか身も蓋もない見解を示している(26-7)。

13 「国民性や、(国家的) 偏狭性そして愛国心」について問いかけるこの小説において (Ó Gallchoir 118)、イングリッシュ・クレイ (the English Clay) と呼ばれる田舎紳士が示す偏狭な島国根性は、そのフランスかぶれの弟フレンチ・クレイ (the French Clay) と同様に愚かしく馬鹿げた態度として断罪される。

14 このことは、エッジワースが最終的に志向するヴィジョンが「イギリス化」であることも無縁ではないだろう。少なくとも、エッジワースは、ブリテンに先進性を認め、アイルランドがそれを吸収することを望んでいた。したがって、『倦怠』以降のアイルランド小説は単独で発表されることはなく、『社交界の物語』 (*Tales of Fashionable Life*, 1st ser. 1809; 2nd ser. 1812) の一部となるなど、イギリスのほかの地域 (主にイングランド) を舞台とする物語と組み合わせて発表されている。

15 Ó Gallchoir は、ヘンリーの育ての親を仲介する「ハンブルクの銀行家」もまたハンブルク在住のユナイティッド・アイリッシュメンの残党を指すと主張している (128)。

参考文献

Edgeworth, Maria. *The Novels and Selected Works of Maria Edgeworth*. Eds.

Marilyn Butler & Mitzi Myers. 12 vols. London: Pickering & Chatto, 1999-2003.

—. *Castle Rackrent, Irish Bulls, Ennui*. 1800, 1802, 1809. Eds. Jane Desmarais, Tim McLoughlin & Marilyn Butler. 1999. Vol. 1 of NSW.

—. *Belinda*. 1801. Ed. Siobán Kilfeather. 2003. Vol. 2 of NSW.

—. *Leonora, Harrington*. 1806, 1817. Eds. Marilyn Butler & Susan Manly. 1999. Vol. 3 of NSW.

—. *Manoeuvring, Vivian*. 1809, 1812. Eds. Claire Connolly & Marilyn Butler. 1999. Vol. 4 of NSW.

—. *The Absentee, Mme de Fleury, Emilie de Coulanges*. 1812, 1809, 1812. Eds. Heidi Van de Veire, Kim Walker & Marilyn Butler. 1999. Vol. 5 of NSW.

—. *Patronage*. 1814. Eds. Connor Carville & Marilyn Butler. Vol. 6 & 7 of NSW.

—. *Ormond*. 1817. Ed. Claire Connolly. Vol. 8 of NSW.

—. *Practical Education*. 1798. Ed. Susan Manly. Vol. 11 of NSW

Edgeworth, Richard Lovell. *Essays on Professional Education*. 1809. Legacy Reprint Series. La Vergne, TN: Kessinger Publishing, 2009.

Edgeworth, Richard Lovell & Maria. *Memoirs of Richard Lovell Edgeworth, Esq:*

- Begun by himself and Completed by His Daughter Maria Edgeworth*. 2 vols. 1820. With an introd. by Desmond Clarke. Dublin: Irish UP, 1969.
- Austen, Jane. *Mansfield Park*. 1814. Ed. James Kinsley. With a new introd. by Marilyn Butler. Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *Persuasion*. 1817. Ed. John Davie. With a new introd. by Claude Rawson. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Butler, Marilyn. *Maria Edgeworth: A Literary Biography*. Oxford: Clarendon, 1972.
- . “Introductory Note” to *Patronage*. Vol 6 of *NSW*. vii-xxx.
- Gamer, Michael. “Maria Edgeworth and the Romance of Real Life.” *Novel* 34 (2001): 232-66.
- “Gentleman.” Def. 4a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 2009. CD-ROM.
- Gonda, Caroline. *Reading Daughters’ Fictions 1709-1834: Novels and Society from Manley to Edgeworth*. Cambridge Studies in Romanticism 19. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Johnson, Claudia L. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: U of Chicago P, 1988.
- Kowaleski-Wallace, Elizabeth. *Their Fathers’ Daughters: Hannah More, Maria Edgeworth, and Patriarchal Complicity*. New York: Oxford UP, 1991.
- Kreilkamp, Vera. *The Anglo-Irish Novel and the Big House*. Syracuse, NY: Syracuse UP, 1998.
- McCormack, W. J. *Ascendancy and Tradition in Anglo-Irish Literary History from 1789 to 1939*. Oxford: Clarendon Press, 1985.
- Moynahan, Julian. *Anglo-Irish: Literary Imagination in a Hyphenated Culture*. Princeton: Princeton UP, 1994.
- Moretti, Franco. *Atlas of the European novel 1800-1900*. Pbk. ed. London: Verso, 1999.
- Murphy, Sharon. *Maria Edgeworth and Romance*. Dublin: Four Courts, 2004.

- Newcomer, James. *Maria Edgeworth*. The Irish Writer Series. Lewisburg: Bucknell UP, 1973.
- Ó Gallchoir, Cliona. *Maria Edgeworth: Women, Enlightenment and Nation*. Dublin: University College Dublin P, 2005.
- Owenson, Sydney (Lady Morgan). *The Wild Irish Girl*. 1806. Ed. Kathryn Kirkpatrick. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Rev. of *Patronage*. *The Edinburgh Review* 22.44 (Jan., 1814): 416-434. *Periodical Archives Online*. Web. 28 Oct. 2010.
- . *The Quarterly Review* 10.20 (Jan., 1814): 301-322. *Google Book Search*. Web. 28 Oct. 2010.
- “Profession.” Def. III.6.a. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 2009. CD-ROM.
- Scott, Walter. *Waverley*. 1814. Ed. with an introd. Andrew Hook. London: Penguin, 1972.
- Spencer, Jane. *The Rise of the Woman Novelist: From Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Blackwell, 1986.
- de Stael, Germaine. *Corrine, or Italy [Corrine, ou L’Italie]*. 1807. Trans. & ed. Sylvia Raphael. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Stone, Lawrence & Stone, Jeane C. Fawtier. *An Open Elite? England 1540-1880*. 1984. Abridged Ed. Oxford: Oxford UP, 1986.
- Takakuwa, Haruko [高桑晴子]. “Maria Edgeworth’s Domestic Novels and National Heroines.” 『ジェイン・オースティン研究』 [*The Journal of the Jane Austen Society of Japan*] 3 (2009): 12-33.
- Yoshino, Yuri [吉野由利]. “‘Spain Vanished, and Green Ireland Reappeared’: Maria Edgeworth’s Patriotism in *The Absentee* (1812) and *Patronage* (1814).” *New Voices in Irish Criticism* 5. Ed. Ruth Connolly & Ann Coughlan. Dublin: Four Courts, 2005. 166-176.
- スタール夫人『コリンナ——美しきイタリアの物語』(佐藤夏生訳)、国書刊行会、1997年。
——『ドイツ論』全3巻(梶谷温子、中村加津、大竹仁子訳)、鳥影社、1996-2002年。